

# シンポジウム 世界文学への招待

パネリスト	田中 亮平	創価大学副学長・文学部教授
	浅山 龍一	創価大学文学部長・教授
	高橋 強	創価大学通信教育部副部長・文学部教授
挨拶	花見 常幸	創価大学通信教育部部長・法学部教授
司会	有里 典三	創価大学通信教育部教授

2017年 8月13日(日)

創価大学本部棟 M401 教室



本部棟 M401 教室

【司会】 ただいまより「世界文学への招待」と題してシンポジウムを開催いたします。はじめに、通信教育部長あいさつ、花見先生よろしくお願いいたします(拍手)。

【花見】 皆さん、今晚は。大変な暑さの中での毎日のスクーリング、本当にご苦勞様です。そして、一日の授業が終わった後の、お疲れのところにもかかわらず、本日のシンポジウムに、このように多くの皆さんに参加していただきまして、大変にありがとうございます。主催者を代表いたしまして、心から御礼申し上げる次第です。

今日のシンポジウムは通信教育部ではなく通信教育部学会という学会の主催になりますが、毎年、この時期、夏のスクーリングの中間点に当たる、このタイミングで



花見通信教育部長

講演会もしくはシンポジウムを開催して参りました。今回は、「世界文学への招待」という格調の高いテーマで、勝手にそう思っているだけかもしれませんが（笑）、こうしたテーマで開催することになりました。その趣旨は、現在、文部科学省に設置認可の申請をしており、無事に認可されれば来年4月からスタートすることになる「文学部人間学科」の通信教育課程について、通信教育部学会としても、その魅力を通教生の皆さんに少しでも早く知ってもらいたいということにあります。

開講式や第2期のガイダンスでも申し上げたことですが、昨年の「学光祭」は、通信教育部開設40周年記念の集いとして盛大に開催することができ、創立者池田大作先生から、「栄光の50周年へ今日から出発です」との大事なメッセージも贈っていただきました。通信教育部として開設50周年に向けての新たなスタートを切ることができた「学光祭」であったわけです。この50周年に向かう通信教育部としての最初の大きな取り組みが、文学部人間学科の開設であります。

おそらく、皆さんにとってはあまり聞かれたことのない話かと思いますけれども、実は、通信教育部として、文学部の開設は長年の念願でありました。随分以前から文学部を開設すべきだという議論はあったのですが、様々な事情もありまして、開設には至りませんでした。そうした中、本格的な高齢化社会を迎え、生涯教育を求める時代と社会の強い要請もありまして、2年ほど前の2015年に大学として開設を目指すことが正式に決定されました。この決定を受けて、開設準備委員会が設置され、今日まで鋭意準備を進めてきたところであります。

お手元のパンフレットを見ていただきますと、創立者が2007年の、通学課程の文学部人間学科開設時に示された3つの大事な指針が掲載されています。「生命の尊厳の探求者たれ」、「人類を結ぶ世界市民たれ」、そして「人間主義の勝利の指導者たれ」という3つの指針です。これらの指針のもと、「創造的人間」の育成を目指すのが文学部人間学科であります。その詳しい教育内容や魅力などについてはこの後、浅山学部長をはじめ、パネリストの先生方からお話がありますので、ぜひしっかり聞いていただきたいと思います。その上で、文学部ですので、経済学部のように数学は必要ありませんので、数学は苦手という方でも、また法律の難しい条文は到底ダメという方でも、安心して楽しく学ぶことができます（笑）。スクーリングが終了し地元に戻られましたら、皆さんの地域の方やご友人にも、ぜひお話をしただき、「文学部誉れの1期生」として入学される方が一人でも多くいらっしゃることを心から願っているところです。

今日のシンポジウムでは、開設される文学部で中心的な科目になります「世界文学への招待」を担当される予定の、文学部の田中亮平先生、浅山龍一先生、そして高橋強先生という3人の先生方に、大変お忙しい中、パネリストとして登壇していただき、それぞれのテーマについて分かりやすいお話をさせていただきます。その後、フロアーの皆さんからの質問も受けさせていただきますので、どしどし質問をして下さい。そして、このシンポジウムが参加者の皆さんにとって、文学部の魅力を十分に感じていただくことのできるシンポジウムとなることを期待しております。

最後になりますけれども、シンポジウムに参加して元気になることは、私の経験上ほとんどないのですが（笑い）、今日のシンポジウムは間違いなく元気のでるシンポジウムになることと思いますので、勉強の疲れを吹き飛ばして、明日からのスクーリング、そして試験に向かうエネルギーを充電する機会にさせていただければと願っているところです。以上、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます（拍手）。

## 文学部開設に向けて

【司会】 続きまして、文学部開設に向けて、浅山学部長（拍手）。

【浅山】 ご紹介をありがとうございます。文学部長をしている浅山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。通教文学部設置については、現在、文部科学省に申請をしているところで、通れば来年の4月から始められるという状況でございます。今日は文学部が開設されることの意義をお話させていただきたいと思います。パンフレットの中にも書いておきましたが、現代という時代は、とにかく健康といっても身体健康だけではなくて心の健康が求められています。心の健康に寄与するのが文学部という位置づけです。文学部の中には社会学や平和学も入っていきまして、社会の仕組みがどうなっているのか、どうあるべきなのか、家族の仕組みはどうなっているのか、これでよいのか、国によってどういう違いがあるのか、また平和はどのように築くのか、これらに答えを出して参ります。哲学もあります。人類の知恵がたまりにたまっており、これを整理したいと思います。それから歴史学があります。これらを物語として描くのが文学です。文学作品を通すと、社会学や哲学や歴史学がいたいことがよくわかってくる。理屈ではわかっているけど、実感としてつかめなかったことを実感として伝わるようにできるのが文学作品です。ということで、文学部でこれらの学問を組み合わせで学んでいただければ、人間とは何なのか、世界では今、何が求められているのかということがわかるのではないかなと思っております。



浅山教授

さて、歴史学の必要性について少しお話ししたいと思います。私に息子がいるのですが、中学校・高校以来、歴史と国語が大嫌いという息子です。わたしが歴史小説をもっと読めとか、本をもっと読まなきゃだめじゃないとか言うんです。すると、この息子は言い返すんですよ。お父さん、過去について勉強してどうするの。前を向いて進もうよと。私は答えに詰まりました（笑い）。たしかに前を向いて進むのは大事です。どう答えてよいか、わからなくなりました。そこで、本学の歴史学の先生に相談しました。どう話したらこういう息子が歴史を勉強するようになるだろうかと。するとその先生が教えてくれました。歴史とか哲学というのは車を運

転するときのバックミラーのようなものだと思う。運転中に、ほとんどバックミラーを見ない人がいますよね (笑い)。うしろを見る余裕がない。過去を見ないんです。危ないんです、こういう人は。バックミラーはときおり見るべきものです。いつも見ていると前に進めません。ときおり見て、後ろを確認しながら進むのが安全です。歴史とか哲学もそういうものだと思いますとその先生が話してくれまして、私も何となくわかりました。そこで、息子に話しました。彼が車の免許を取ったときだったので、ちょうどよいタイミングでした。車の発進時に、うしろに車がいて、近づいているのを知らないで発進するとどうなる、と訊きました。「そりゃ事故る」と息子は答えました。さらに、後ろに人がいて脇を通り過ぎようとしているかもしれない、急に発進したら危ないだろう。「そりゃあそうだ」と答えました。同じように、右折左折するときバックミラーやサイドミラーで後ろや脇を確認しないと、これも事故のもとです。バイクなんかすぐ脇まで入って来ていますよね。息子も納得していました。「そりゃそうだ」と。過去のいろいろな教訓を取り入れながら、前に進むのが賢い生き方だ、過去と同じ失敗をしないために、歴史の勉強はあるんだと話しました。ある日、気がついたらこの息子が『小説・人間革命』を読了するんだと言っていました。別のときには、吉川英治の『水滸伝』を読んでいた。現在、本学を卒業しまして、小学校の教員になっています。なんと国語や社会を教えている。まあよかったなと思っております (拍手)。

もう少し通教文学部の宣伝をさせて頂きたいと思います。皆さんのお知り合いの方にお話して頂けるとありがたいです。私たちは中学、高校そして大学と、たくさんの科目を学びました。倫理や哲学、日本史も世界史も学んだ。古典も読んだ。近代文学も現代国語の中で読みました。この知識と教養をそのままにしておくのではなくて、その背後に何があったのか、そして今後、何が必要なのかを勉強するために文学部に来ませんか。せっかくいろいろな知識・教養を身につけたのだけれども、それを深める時間がなかった方には文学部に来てほしいのです。また歴史の話をしますが。私は大学入試は社会科分野は日本史で受けました。これは世界史よりも入試問題が簡単だろうと考えまして。ところが、大学に入ってからわかったことは、今、必要なのは世界の中の日本ということです。日本の歴史だけではなくて、世界の中で日本がどういう位置付けで、今後世界にどう貢献できるかということが大事なんです。たとえば遣唐使が何年に送られたか、阿倍仲麻呂が行ったとか、吉備真備が行ったとかいうことは私もすらすら出てくるのですが、なぜ行ったのか、行った先の中国はどういう状況だったのか、その頃ヨーロッパはどうだったのか。そういうことを私は知りませんでした。そして遣唐使たちが日本に何を伝えて、それが今日活きているのか、どういう意味があったのか、といったことも知らずにきました。また、哲学ですけれども、大学生になって分かったのですが、釈迦と孔子とソクラテスがほぼ同じ頃に活躍しているんですね。紀元前500年頃に彼らは登場しているんです。びっくりしました。わたしは釈迦が一番古いと思っていたのですが、なんと孔子と同じ頃なんですね。ソクラテスも同じ頃にいた。そのあと旧約聖書が出てくる。これが紀元前500年から紀元前200年にかけて書かれていく。イエ



ス・キリストが出てくるのはそれよりさらに200年あと、紀元元年、A.D. 元年ということになります。そしてイエスの言動をまとめた新約聖書が書かれる。これらが今日まで残ったわけですが、仏教とギリシャ哲学と儒教、そしてキリスト教の違いは何なのか。これも本学文学部に入るまで知りませんでした。ぜひ、多くの方に文学部で学んで頂きたいと思っております。そして、文学です。主人公がある生き方を示してくれる。ある哲学を持っていて、それを実践してみるとどうなったかが、文学を読むとわかります。歴史上の出来事についても歴史小説を読むと実感としてわかります。吉川英治さんとか司馬遼太郎さんとか山本周五郎さんが、ものすごく上手に書いてくれていますよね。私たちは主人公たちと一緒に人生の問題について答を出していくことになります。これが文学の役割ではないかなと思っています。

文学部には、花見部長がおっしゃったように、2007年に創立者から戴いた3つの指針があります。1つは「生命の尊厳の探求者たれ」です。これは私の解釈ですが、国家、民族を超えて、人間は可能性に満ち溢れている。これを互いに尊敬することができるような人間になりなさいということではないか。2つ目は「人類を結ぶ世界市民たれ」です。異文化を認める寛容性を持ちなさいという意味でないかと思っています。違った文化を認めるのは勇気が必要ですが、よいものは取り入れないと文明は発展しません。そういうことができる国際人を作っていきたいと思っております。最後は「人間主義の勝利の指導者たれ」です。人間らしい学生、自分のことだけではなくて仲間と助け合ったり、自分の幸福だけでなく自他共の幸福を求める学生を作っていきたいと思っております。そういう学部を作って参りますので、ご支援のほど、どうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました（拍手）。

## ゲーテの世界文学論

【司会】 どうもありがとうございました。では早速シンポジウムに入りたいと思います。

最初に田中亮平先生から「ゲーテの世界文学論」と題して講演をしていただきます（拍手）。

【田中】 みなさんこんばんは。いまご紹介いただきました、田中と申します。「ゲーテの世界文学論」ということですが、私は専門がドイツ文学でありまして、しかもゲーテを専門にしております。2003年に創立者池田先生が特別文化講座を開いてくださいました。場所はまさにこのM401教室でした。私が座っていたのは、左側の緑の服の男性の方がおられるあたりでした。創立者からは、ゲーテに関連して何回も声をかけていただいたり、質問していただいたりした思い出があります。

今日は「世界文学への招待」ということで、すでに学



田中教授

部の方では開講されていますが、通信教育部に文学部が開設されますと、この科目も開講されることになります。私はゲーテのところを担当させていただくことになり、今日もお招きいただきました。ゲーテにとっての「世界文学」ということでお話しさせていただきたいと思います。

まずその前に、いま浅山学部長の方から文学というものがいかに有効であって、世界文学というものがいかに大事かという話をさせていただいたわけですが、おそらくみなさんの中には、文学大好きで、多くの本を読んだという方もいらっしゃるかと思います。でも、ひょっとしたらそうでもない方もいらっしゃるかもしれません。

ゲーテはあまり読んだことないなとか、なんだか文学って難しそうだな、よくわからない言葉もいっぱい使っているんじゃないかなとか、日本の文学ならまだしも、世界文学なんて、というような気持ちが頭の片隅に浮かんできたという方もいらっしゃるかもしれません。その上現代のもの、この同じ時代のものならまだいいけれど、たとえば2000年も前の文学や、もっと前の古代ギリシャ時代の文学、あるいはダンテなどの、何百年も前の文学となると、なおいっそうなじみが薄くなります。

何よりも、世界文学なんて言ったら、それこそ山のように、あるいは星屑のように限りなく沢山あるんじゃないだろうか、全部読むなんて絶対無理だから、いっそのこと全然読まない方がいいんじゃないだろうか（笑い）。そういうふうな疑念を抱かれる方もいらっしゃるかも知れません。

こんな世界文学なんていう迷惑なものを、いったい誰が言い出したのか（笑い）。これがゲーテなんです。フルネームはヨハン・ヴォルフガング・ゲーテといいます。が、生まれたのがちょうど18世紀の半ばぐらい、1749年です。そして1832年に亡くなりますので、82歳の長寿の生涯でありました。ドイツの人で、もちろん詩人、小説家、劇作家として有名ですが、意外と知られていないのは、彼が自然科学者だったということです。いろんな分野の自然科学を旺盛に研究しています。それから、これも一般にはあまり知られていないことですが、ゲーテは政治家でもありました。小さな公爵家の国に、今で言う就職をしたのが26歳で、そのあと亡くなるまでその国にとどまって、一時はその総理大臣にあたる役職まで務めます。

ゲーテの代表作といいますと、まず『若きヴェルテルの悩み』です。これは25歳の時の作品です。これで彼は一躍ヨーロッパ中に名前がとどろきわたります。その反響はやがては東洋にまで及ぶことになりますが、のちにゲーテ自身が詩の中で、支那人までがその繊細な手で、ヴェルテルとロッテの姿を陶磁器に描いたとうたっています。またこの詩とは別に、どこかの王宮のお祭りでは、「天上におけるヴェルテルとロッテの再会」と題する花火が挙げられたという話もあります。ヴェルテルは物語の最後で、若くして自殺します。そこでロッテも人生を終えた後に、天国で二人が再会し、めでたしめでたしになりました。そういう場面を表現した花火というわけですね。

ゲーテのもう一つの代表作は、悲劇『ファウスト』です。第1部が1806年、第2部が1831年に完成しています。それは亡くなる前の年でした。まさに畢生の大作で

す。ゲーテが残したこれらの作品は、いずれも世界文学を代表する作品といわれています。ところが先ほどいいましたように、世界文学という言葉はゲーテが言い始めたとされているわけです。これはどういうことなのでしょう。なぜなら、ゲーテが言うよりもずっと前から世界文学の名作は存在していたからです。

『神曲』の作者ダンテはゲーテより500年ほど前の人だし、ギリシャのホメロスなんて、それよりはるかに以前の人です。東洋では、中国の李白や杜甫もうんと前の人です。ところがゲーテは次のように述べています。これが世界文学はゲーテが生み出した言葉だということの根拠になっている箇所なんです。それは、1827年1月31日、亡くなる5年前、秘書のエッカーマンに向かって言った言葉です。

「今日国民文学はあまり意味がない。世界文学の時代が到来しているのだ。だからだれもがこの時代を促進するよう努力しなくてはならない。」

これが謎なんです。なぜこの時になって言い出したのかってことです。いまいいましたように、世界文学はもうたくさんあったわけで、代表作と言われるものもその前にたくさん出ている。ゲーテ本人も書いている。

さきほどの『ヴェルテル』ですが、これはドイツ文学の代表作として初めて世界の文学に肩を並べるものが書かれたと言われている作品です。そのため、ゲーテを以てドイツ国民文学は始まったと言っても過言ではない。ところが、その『ヴェルテル』にはホメロスに関する記述が繰り返し出てくる。イギリスの哲学者やフランスのルソーの影響もある。その挙句に、イギリスの『オシアン』という詩を、かなりのスペースを使ってそのまま引用しています。つまりゲーテは最初の国民文学の代表者として登場したのに、すでに世界文学をたくさん参照し、取り入れているわけです。

さらにその後の壮年期になるとなおさらです。この時期のゲーテの模範は、古代ギリシャ・ローマです。それから晩年になりますと、ギリシャ・ローマをとび越えて、中世のペルシャまでいたりします。今の中近東ですね。そこのハーフィーズという詩人に、わが身をなぞらえて『西東詩集』という連作詩集を作ります。ちなみにそのまえに、地理的にはもっと東のインドの伝説に取材した詩も書いています。中国の文学にも注目していますが、特に最晩年には中国の詩の世界にわが身をおいた連作詩を書いています。

先ほど紹介した、秘書のエッカーマンに語った言葉ですが、実はその直前のところでこんなことを述べています。中国の人たちが書いた小説を読んでみた。中国の人たちは、本当に道徳的な人たちだ。若い男女が、一つの部屋にいて、一晩一緒に過ごしているけれども、彼らは手も触れない。それと比べれば、フランスの詩人のあつかう題材はみだらなものにみえる。何というこの国民性の差だろうか。しかしそうした差異も含めて、詩は人類の共有財産だ。こう言った後に、さきほどの世界文学の時代が始まったと言う箇所になるわけです。

要するに、世界文学を若い頃から取り入れて、自分自身も相応の質の作品を書き続けた生涯を、ずっと送ってきたにもかかわらず、亡くなる5年前の77歳になって、世界文学の時代が始まったというふうに言っている。これはいったいどういう

ことなんだろうか。どうも私たちが普通に考えている世界文学とはちがうことを、ゲーテは考えていたんじゃないかと。

そういうわけで、もう一度世界文学とは何だろうと考えて見ますと、第1に、諸国民・諸民族が古来から文字に残し、あるいは言い伝えてきた文学的作品の総体と考えられます。これは量的にみた世界文学ということになります。しかし、先ほども言いましたように、これではつかみどころがなく、到底すべてを知ることはできないということになるわけです。

そこで第2に質的に見た世界文学ということになりまして、たとえばほかの言語に翻訳されている。他の民族に受け入れられて流通する。つまり、翻訳が世界文学になるための最低条件ということになります。しかしそれだけでいいかというと、そうでもなくて、たとえば一時的に多くの読者に恵まれるけれども、10年も経ったらみんな忘れてしまったということでは、世界文学の条件には合致しない。したがって、空間的に広まると同時に、何十年も何百年も、翻訳された相手の国で読み継がれていくことが大切です。空間を超え、そして時間を超える。この2つの面での質というのが重要なメルクマールになるわけです。

しかしながら、ここまでならば、ダンテだってシェイクスピアだってみんなそうなんですね。ゲーテ本人もそうでした。だったら、始まっていると彼が言っている世界文学とは、一体どんなことを言っているのでしょうか。それは交流と、共同作業としての世界文学です。つまり、同じ時代に活躍している各国の文学者たちが、直接交流する。そしてそこで何か生産的、創造的なものを生み出していく。そのためには各国の国民がお互いをよく知らなきゃいけない。お互いがどういうふうなことを考え、どういうものを書いているのか、それを直接の交流を通して知る。そういう意味での世界文学が始まったんだと。そういうようなことを言ったのではないかと思われるわけですね。ゲーテはだいたい晩年の10年間、より積極的にそういう共同体づくりに貢献しようとしします。たとえば先に引用したエッカーマンに語った言葉の4日前に、こういうことを言っています。

「世界文学なるものが形成されつつあること。あらゆる国民がそれに興味を持っており、したがって、仲よく歩調を合わせていること。ドイツ人はこうした大きな出会いにおいて、重要な役割を果たさなくてはならないだろう。」

歩調を合わせる、つまり各国の人たちが共同作業をする、しかも仲よく。さらに、大きな出会いという言い方をしています。国民、民族の違いを超えた大きな出会い。要するに、超国家的な共同体というのをイメージしていたわけです。その翌年、ベルリンの自然科学者たちの会合に寄せたメッセージでは次のように述べています。

「ここでいう普遍的な世界文学というのは、元気旺盛に努力している文学者たちが互いに知り合い、愛情と共通の関心によって共同で活動する契機を見出すということである。」

共同活動の契機、これは先ほどの「歩調を合わせる」と同様のことでありますが、何のためにゲーテはこういうものが必要だといったのか。単にお互いの文学の



発展のために必要だと考えたのか。彼が考える世界文学が、共同作業を意味していたとしても、彼は何のためにそういうものが必要だと考えたのか。最初の、ゲーテがエッカーマンに語った言葉にもう一度戻って見ましょう。

「われわれドイツ人はわれわれ自身のこの狭い範囲から外へ目をむけなければ、ただちにペダンティックなうぬぼれに陥ってしまうだろう。」

こう言っているんですね。ドイツ人の持っている、一種の偏狭な、すぐうぬぼれてしまうそういう国民性。これを彼は危惧していたわけです。

「だからこそ私は、好んで他国民の書物を渉猟し、ほかの人にもそうするようすすめているわけである。」

と続くわけです。他国民の書物を読むことで、他者を知り、翻っておのれを知る。そうすることで独りよがりのうぬぼれに陥ることを防ぐ。だから世界文学の時代の到来を促進しなければいけないとゲーテは考えているわけです。

さて、このプロセスについてですが、実は現代は国際化の時代、グローバル化の時代で、外国へ行って異文化を知るということは非常に大事だとされています。あるいは、外国から来た人と付き合っって異文化を知ること大事なことだとよく言われるわけです。その際に、一つの定番の言い方されるのは、他者を知るということはそれにとどまらない。他者を知ることを通じて自己を知るのだと。たとえばよその国に行ったら、みんながご飯を食べているわけではないことを知る。実はパンを食べるのがふつうの国もあるわけです。またたとえば、レストランでお会計をするときに、レジに行っってするものだと日本人はみんな思っっているけども、そうではない国もあります。店員がテーブルへやってきて、そこで支払いをするっっていうところもある。実は私も初めて外国へ行っったときずいぶんそれで戸惑いました。レジがないので探したけれど、どこにも見つからなくて当惑してしまいました（笑）。

つまり、こうした異文化の経験を通して、当たり前だと思っっていることが、外国では当たり前ではないということを知る。これが他者を知るということですね。翻っって、逆に自分たちのやっっていることも、外から見たら実は当たり前ではないんだと知る。それで自己を知るということになるわけです。

これが異文化理解の基本的なプロセスだと言われるわけですがけれども、実はゲーテが世界文学の理念で提唱したことの目的も、実はこういうことだったんですね。ダムロッシュという人が世界文学は多角的な世界の窓であると言っています。つまり、世界文学とは、諸国民そのものの間を仲介する窓のような存在だ。そういう役割を果たしうる文学を名づけて、ゲーテは世界文学と呼んだのだと。

ゲーテは一つの大きな市場のようなものをイメージしています。そこに、自分たちの精神的財産をみんなを持ち寄ろうじゃないかと、そこでそれをお互いに交換し合おうじゃないかと、そういう場を作っていこうじゃないかというようなイメージを持っっていたわけです。

ゲーテがこうしたことを書いた1827年頃、ドイツではナショナリズムの運動が勢いを増していました。また3年後の1830年にはフランスで七月革命が起こっって、ヨーロッパ各地に余波が及びます。ゲーテはこうした時代の中で、諸国民の相互理解

と平和的共存を念願していたわけです。しかしそうした願いも空しく、残念ながら1945年にいたるまで、ヨーロッパは断続的に大小の戦争を繰り返し続けました。ゲーテの世界文学の理念には、そういう現実を何とか変えたいという思いが込められていたのです。

今日のグローバル化の時代、世界文学の理念が含む範囲はゲーテ時代よりももっとずっと広がっていて、アフリカや中南米、アジア諸国の文学などもその対象になっています。そういう意味ではこの「世界文学への招待」という授業が、諸国民の相互理解と平和的共存をめざす世界市民としての素養を育む一助になればと念願しております。ゲーテ編はこれで終わります。ありがとうございました(拍手)。

## エマソンと自然

【司会】 それでは2番手の浅山先生から、「エマソンと自然」というテーマで講演をしていただきます。よろしくお願いします(拍手)。

【浅山】 エマソンについてお話させていただきます。多くの皆さんが『英語 I B』のメディア学習教材を見ていただいて、大部分は理解していただいているのではないかなと思いながら話をしたいと思います。エマソンですが、1803年生まれで1882年没ということで、ゲーテの後に活躍します。エマソンは33歳で牧師を辞め、ヨーロッパに旅行します。ゲーテに会いたかったようです。考え方がすごく近いと思ったのでしょうか。ヨーロッパを10か月ほど旅行するのですが、その間に、ゲーテが前年に亡くなっていたことが分かってショックを受けます。ゲーテのいないヨーロッパに用はないといって帰ってきたそうです。さて、田中先生のお話にありましたが、ドイツのゲーテがフランスのルソーを尊敬していたとのこと。またゲーテはイギリスのシェイクスピアも尊敬していたと聞いています。そしてゲーテのあと、1830年代に活躍するのがアメリカのエマソンですが、フランスのルソーを尊敬し、ドイツのゲーテを尊敬しているんですね。ゲーテもエマソンもその志向性において国境を越えています。田中先生のお話だと、謙虚に違う文化を取り入れて自分の作品に反映していくような文学が世界文学であるということだったと思うんですけれども、エマソンはまさに世界文学を書いていたと思います。

そのゲーテですが、『ファウスト』の中で、悪魔のそそのかしにより、どんな魔力を使っても（それには罪なき者の犠牲が伴うのですが）世界の真理を知りたい、それができれば、あとは悪魔の奴隷になってもよいという主人公を描いています。たぶん、ゲーテは悪魔というのは外にいるのではなくて自分の中にいるのだと言いたかったのだと思います。私たち自身もそういう誘惑を感じないでしょうか。一方ゲーテは、神も自分の中にいるということを、別のところで言っています。それ名作『若きヴェルテルの悩み』です。私も学生時代夢中になりましたけれども、この『若きヴェルテルの悩み』の中で、青年ヴェルテルが、大自然の動植物を観察しているんです。虫も観察しており、僕は虫になりたいとか思っている。そして、この自然の荘厳さ、美しさ、神聖な息吹、生命力、これを感じながらつぶやくんです

ね。僕は神になったような気がする。8月18日の書簡に書いています。ところがその頃、美しいロッテという女性に夢中になってしまふ。ロッテには婚約者がいるので、とんでもない恋愛になってしまいます。いわゆる片思いで、激しい思いのため、彼は前が見えなくなります。恋の病で苦しみ抜くわけです。若い頃には一回は皆さんも経験した世界だと思いますが、ロッテしか目に入らなくなった彼は、もはや僕は神になったような気がするなどとは言わなくなります。正気を失ってしまい、それからあとは破たんへの道をまっしぐら。ついには自殺をしてしまいます。一恋愛というのは、正気を失わせる場合がありますので気を付けていきたいと思えます。『ファウスト』も『若きヴェルテルの悩み』も、人間の真実の側面を描いています。どこの国でも通用するし、どこでも取り入れられる。日本でも紹介されて、人々の心をとらえました。世界文学と言えらると思えます。

さて、エマソンですけれども、ゲーテの影響もあったのか、神はすべての人の中に宿るということをおととき発します。彼は、神は本来すべての人の中にいるのだということです。どういう人だったかということ、彼は牧師でした。ハーバード大学神学部にいるとき以来、『聖書』を読みに読んでおりました。これは世界文学です。世界中で読まれて、それが取り入れられて、多くの文学作品の中でも展開されていますから世界文学ということになると思えます。エマソンはそれ以外にルソーを読んでいた。このルソーがすごいことを言っています。神は世界を創り、そして創った後どうしているか。誰も思いつかなかったことですが、ルソーは言います。神は創った後、自然界にとけこんだ。だから自然界には一つの秩序がある、法則のようなものがある。たしかに、春夏秋冬がきちんと繰り返される。寒くなると、渡り鳥が移動する。魚だって暖流を求めて移動する。すべてのものが私たちのまわりで生と死を繰り返している。そういうリズムを誰が創ったのか。神しかないではないか、となります。これを創って、誰が動かしているのか。神である、と。ではこのリズム、法則自体を名づけて神と呼ぶことができると。これがルソーの発想だったんですね。『エミール』という本の中にこういうことが示されています。そしてこの自然、リズムと一つになれば、動物も人間も幸福になれる。もし一つにならない場合、つまりこの自然の法則に従わない場合、誰しも病気になったり危険な目にあうと。ルソーはこの法則を掴むのが難しいと言いました。自然という厳しい教師が私たちを鍛えてくれるのだが、なかなか掴めない。だから、生まれた子供のうち半数は8歳にならないうちに死ぬ。これが自然の法則であり、逆らってはならないと。最後まで読むと結構冷たいことを言っています。エマソンはこれを読んで反発したようです。彼の周りには病気の人が多かったからです。なお、『エミール』は、階級の差と関係なく、国王であろうと誰であろうとこの法則を掴んだ人は全員幸福になるという考え方なので平等主義です。自由平等の発想が強く出ています。これが出版されて、教会が憤ったと言います。教会に行かなくても、法則を掴んだ人は幸福になるわけですから。国家権力に働きかけてルソーを捕まえろとなりましたが、ルソーは亡命してしまいます。『エミール』は集められて焼かれたそうです。さて、エマソンですが、ルソーの考え方を展開します。彼は自然の法則とか宇

宙の法則を感じることは、すべての人に可能であると言います。ルソーは難しいと言ったのですが。エマソンは言います。神が絶対者であるならば、不完全な世界を創るわけがない。『聖書』のなかに書いてあります。神は自らに似せてアダムを作りましたまいかと。すなわち、神は自分に似せて人間を作ったんです。その子孫が私たちです。すると、私たちには全員、神の力が備わっていることになります。自然の法則と宇宙の法則を感じ取った時に、神と等しい境地に達する。神と等しい境地にいるのだから神である。こういう展開になるわけです。こういう発想をもったので彼は牧師をやめた。教会で教えていることとは違うわけですから。教会においては、神は一人ですから、誰しも神になれるというのは大違いですね。彼は次のようにも言います。私の中にいる神が外にいる神を崇拜するのだと。神はすべての人の中にいますから、私の中にいる神が、あなたの中にいる神を崇拜する。だからあなたは大事なんですともとれます。大変な発想です。

また別の発見があります。神が作り上げた自然界は見事な出来栄である。絶対者ですから。自然界にはライオンがいる。それは、私たちの中にもライオンがいることを示しているということです。ライオンはいつも怒っている。私たちの中にも怒りの命があるではないかと。自然界に狐がいる。私たちの中にも狐がいるということ。自然界は教えてくれている。ずるい命があるではないかと。自然界に岩がある。私たちの中にも岩のように頑固なところがある。自然界に松明<sup>たいまつ</sup>がある。私たちの中にも松明があつて、学問とかに憧れる、光を求める、そういう命があるではないかと。自然界に蛇がいる。私たちの中にも蛇がいるんだ。恨みとか妬みがあるでしょうと。こうやって説いていきます。自然界には闇があり、私たちの心にも闇があると。自然と私たちは一体だと説くのです。こういう展開いかがでしょうか。そして、彼は言うんですね。同じように私たちの中に神がいる。これらのことをすべて理解できるのが神である。自然あるいは宇宙と人間は一体であるという法則を理解できるとき、私たちは神なのだ。こういう大きな境地に立つ時、つまらぬ悩みは消える。自分がよく見えてくる。自分の心の動きが見え、苦しみの原因がわかる。原因がわかればそれを直せばよいのだと。すばらしい考え方だと思いませんか。

こういったことを一番よく理解するのはだれか。エマソンは子供だと言います。ルソーは子供というのは弱くて、8歳までに半数は病気で死ぬとか言っていましたけれども、エマソンは、子供こそが自然に近くてすべてを受け入れる、健康で、神に近い存在だ、神の力を感じ取る力があると言います。実際子供は怖いもの知らずですね。小さければ小さいほど怖いもの知らずです。あそこに行くと言えば必ず行きます。死を恐れていない。悪さをして叱られても、すぐ立ち直ります。罪悪感ほとんどない。神のようです。罪悪感を持った神は考えられませんから。子供は自然が大好きです。みなさんも小さいときは虫を追いかけてませんでしたか。大きくなるにつれて、虫を嫌がる。そうやって自然から離れていく。自然の法則から遠ざかっていくんですね。エマソンは言います。自然の法則を理解する人は、大人になっても子供の心を失わない人だ、心のきれいな人だ、敏感な人だと。



このエマソン思想を展開するのが弟子のソローです。その思想は世界に伝わり、ロシアのトルストイが受け入れ、インドのガンディーが受け入れています。みな理想が高く、行動的な人たちですね。日本では、内村鑑三という思想家（キリスト教の牧師ですが、教会なんかいらなかった人です）が受け入れましたし、詩人の徳富蘆花が詩集『自然と人生』の中でエマソンに言及しています。また、夏目漱石が、エマソン思想を取り込んだと私は思っています。漱石の『それから』という小説を読みますと、その中で主人公がエマソンやトルストイを読んでいるんです。『三四郎』の中の広田先生、あるいは『吾輩は猫である』の中の苦沙弥先生は、周りで何が起こってもびくともしない。エマソンのように超然としている。呑気とも言えますが。また、エマソンの影響で、活発な少年少女の文学がアメリカに生まれています。ひとつは『若草物語』。負けず嫌いの成長期の4人姉妹の物語です。少女たちの冒険的な行動が少し度を超す。それをたしなめるのが隣家のローレンスさん。私も調べてみましたが、作者オルコットの家のおすぐ近くにエマソンの家があるんですよ。超然としたローレンス氏は、エマソンがモデルだと言われています。次に、『トム・ソーヤーの冒険』という少年の物語が出てきます。エマソンが讃えた子供——伸び伸びとして不遜でさえある子供の世界を見事に描き上げた文学です。日本では漱石が『坊っちゃん』を書き上げています。負けず嫌いで正義感の強い、青年教師の物語。子供(心)を称えたエマソンと、エマソンの弟子として師の仕事を支えた、正義感の強い青年ソローを彷彿とさせます。エマソンもソローも最初は教育者でした。

以上、エマソン思想の斬新さと影響力を考えても、エマソン文学は世界文学と呼んでよいのではないのでしょうか。ありがとうございました（拍手）。

## 阿Qの精神的勝利法

【司会】 続いて高橋強先生から革命作家・魯迅を語っていただきます。代表作『阿Q正伝』という作品になりますが、その中の主人公、「阿Qの精神的勝利法」と題して講演をしていただきます（拍手）。

【高橋】 皆さん、今晚は。私で終わりますのでね。私は1期、2期とずっと授業をやってしまして、こんな声になってしまいましたが、本当はもっと美声なんですけれども……（笑い）。20分間付き合ってくださいなと思います。私は次の4点をお話をしたいと思います。最初は、作家魯迅、それから『阿Q正伝』、阿Qが出てくるこの小説『阿Q正伝』ってどんなものか。その中で特に阿Qの精神的勝利法、これを紹介します。そしてこの阿Qという主人公の行動ですけど、そこにどのような世界性とか普遍性が見えるのか、そんなお話をしていきたいと思います。私の話のバックグラウンドは、創



高橋教授

立者が2005年に第2回の特別文化講座をされましたが、その内容です。本部棟での講演であればよかったんですけど、新聞紙上で出されました。今日はそれを中心にお話をさせていただきたいと思います。

まず、作家魯迅なんですけどね、いつごろの人か。1881年から1936年、ちょうど日中戦争が始まる前の年まで生きていました。中国の時代でいうと清末から中華民国、まさに封建社会が崩壊をして、近代国家に移るちょうどその過渡期に生きた人で、亡くなった時に、6000人の人が葬儀に参加したというんですけども、その大半が青年だったというふうに言われています。いかに青年に影響を与えたか、また青年から、魯迅というのは一つの目指す対象でもあったのかなと思います。生まれたのは中国の浙江省、上海から西の方に行きまして浙江省というのがありますが、紹興というところで生まれています。皆さんはおそらく紹興酒で、名前を聞くかと思うんですけどもね。紹興酒、飲むときはですね、ちょっと温めて、砂糖を入れるとおいしいです（笑い）。生まれたのは地主の家に生まれていますので、まったくの下層の身分ではありませんでした。おじいさんが科擧の試験で最後の殿試という位までのぼり詰めた、そういう地位ですので、そこそこの家柄だったと思います。

魯迅は21歳から28歳の時に、日本に留学する機会を得ています。異文化交流、異文化体験をする大きなチャンスだったと思います。最初に弘文学院というところで学びます。嘉納治五郎が校長をやっていたんですけども、この人が創った学校に入りました。ちょうど魯迅が弘文学院で学んでいたところに、牧口常三郎先生がこの学校で教えています。ですから魯迅が在籍していた時期と、牧口先生が教えておられた時期が重なり、それは大体3か月から4か月くらいあるんですけどもね。どういう出会いがあったかは、またこれから解明が進められると思いますけれども。その後、仙台の医学専門学校に行って、藤野先生という魯迅のことをとても面倒を見てくれた先生との出会いがありました。魯迅は、恩を返すつもりで亡くなる前年に、1936年の作品でしたかね、『藤野先生』という作品を残しています。それから、魯迅がある事件、幻灯事件ということがあって、魯迅は医学から文芸へ転向する、そういう出来事があります。仙台の専門学校で学んでいたとき、たまたま授業で時間が余って、先生が幻灯、皆さん幻灯ってなんだかわかりますか。スライドです。今ふうに言うと。まあ古い言い方ですね。スライドを見せてくれました。1906年の出来事で、藤野先生という作品のなかに出ているんですけども、そこでそのシチュエーションが、中国人のある人が、日本軍からスパイ容疑をかけられて、まさに公開処刑をされようというその瞬間を、スライドを通して、魯迅はその瞬間を見るんですね。まさに日本軍によって処刑されようとしている中国人。そしてそれを遠巻きに見ている中国人の同胞の人たち。その人たちの目を見ると、どうもぼーっとしていると。殺されようとしている人の目もぼーっとしている。それを見てる同胞もぼーっとしている。その瞬間に魯迅は、そこに当時の中国人の奴隸的根性というものを見出したようで、これを何とか変えていかなければいけないと。それでその後魯迅は国民性の改造というところに意識が向かっていきます。

これは幻灯事件が一つのきっかけでしょうけれども、おそらくその前から、魯迅研究者の片山智行さんなんかは、魯迅は、このところに至るまでずっと生まれて育つ中で、当時の中国人の持っている「馬馬虎虎」、これは欺瞞とか虚偽とか妥協とか、というものを含めた、いい加減さというものなんですけども、それにずっと憤りを感じていたと。それが一気にこの幻灯事件で爆発したのではないかというふうに言っています。私もその通りだと思います。医学から、文芸に転向して、魯迅は医学を通して中国人の国民性を改造するという方向性に変えていきます。ちょうどその時に、お世話になった藤野先生に会いに行って、別れを告げるんですけども、その時に、藤野先生が、写真の裏に、惜別、周君と書いて、一枚の写真をくれるんですね。ここで初めて魯迅の本当の名前がわかります。周樹人なんですね。本名は周樹人です。紹興出身で、名字が周と言われて、ある方はぴんときると思うんですけども、実は周恩来と親戚関係になります。魯迅の方が本家筋のようですね。

その後、東京に戻って、そこからだんだん作家魯迅の原形というものが出来上がっていきます。東京時代にはたくさんの書物を読みながら、小論文を書いたり、文学論を展開したりしているんですけど、有名なところでは、「文化偏至論」というのがありまして、これは小論文なんですけれど、特にこれはドイツのニーチェの影響をかなり強く受けている小論文です。それから、「摩羅詩力説」というのは文学論なんですけれど、特にイギリスのバイロンを中心としたロマン派の詩人たちの影響を強く受けています。ですから作家魯迅が生まれる前ではあるんですけども、このように魯迅は日本にしながら、西洋の哲学、それから文化というものを吸収をしていくんですね。その後、帰国して教師、教育部の役人等々を経ながら、1918年にあの有名な『狂人日記』が出来上がります。

そこで1つ強調しておきたいのですが、作家魯迅は有名なんですけども翻訳家魯迅というこの視点も外しちゃいけないと思うんですね。なぜならば、魯迅全集の半分は翻訳なんですね。特に日本語から中国語、それからドイツ語から中国語、魯迅はかなりドイツ語もできたようです。このへんも国民文学から世界文学へ、その助走なんかが見えたりするんですね。それから創立者は、魯迅は2つの顔を持っていると述べられています。1つは、革命のペンの戦士としての顔、それからもう1つは哲学者の顔。実は魯迅は作家になる前、かなり仏教書を読んでいます。日記を読むと、それが出てくるんです。私もどんな経典を読んでいるかと思っていろいろ探してたんですけども、残念ながら、法華経は出てこなかったです。魯迅は、釈迦を非常に高く評価しています。

魯迅の有名な文体は雑感文と言いまして、批判文なんですね。国民性を改造するという意味で、かなり魯迅は批判文を書いています。魯迅の雑感文というのは、“寸鉄人を刺す”、小さい刀であるが刺すと血が吹き出してくるといった言葉で形容できますが、それぐらい激しく、痛烈さをもっていた、と言われていています。“寸鉄”、どっかで聞き覚えありませんか。毎日読んでいると思いますけどね。『聖教新聞』にありますけど、もし切れ味が悪かったら、本当は寸鉄と言えないと思います。

それは置いて、ということで批判文をかなり書いていますので、やっぱりたくさん敵ができるんですね。ですので実は魯迅は100を超えるペンネームを持っていました。

次は、時間がないので『阿Q正伝』です。新聞小説として、連載されるんですけど、時代は20世紀の初めでちょうど清末から中華民国へかけて中国の激動の時代で、辛亥革命前後の時代設定です。中国のある未荘という農村の設定なんですけれどね、そこでの主人公は、皆さんご存知のように阿Qです。阿Qの虚偽、欺瞞に基づいた自分自身を欺いた生き方、それを滑稽に颯爽と、書いてるんですね。滑稽に、颯爽というところがちょっと面白いんですけども、当時の中国人の国民性の典型として阿Qを描いています。全体を簡単に言うと、当時、その村に辛亥革命の革命党がやってくるんですけども、その革命の波に翻弄されて、阿Qはわけのわからないまま泥棒の疑いをかけられて、逮捕・処刑されて、最後に“ああ助けて”というところでおしまいと。これはいったい何を意味しているのでしょうか。最初の部分は滑稽で、颯爽と描いてるんですね。最後は処刑でさようならと。これはですね、魯迅は、阿Q的精神を非常に批判しているんです。この批判を通して、当時の中国人の国民性を変えていきたいと。ですから、最後に、阿Qを殺したのは、もうこういった阿Qの子孫には誕生してほしくないと、そういう痛烈なメッセージが込められています。

次に、阿Qの「精神的勝利法」とは何かってということなんですけれども、実は阿Qは、自分で名字がわからないんです。姓、李さんとか王さんとか張さんとか、そういう姓も書いていません。中国の社会で姓がわからない、これは最低の人間を意味しています。したがって、阿Qは自分の名字がわかりませんので、みんなからバカにされて、仕事もない、住み家がない、でも腕力だけはある、自尊心だけは強い、そういう意味で結構喧嘩をするんですね。でもお金がなくて、あまり食べてなく、力が出ないから負けちゃうんですね。そのあとの、負けたあとの、阿Qの勝利の仕方、即ち、相手が去って、去った後どう言うか、去った後、おれはせがれにやられたようなものだ。この一言っていうのは非常に深い一言で、当時、中国まだ儒教精神が非常にしっかり残ってまして、身分的に一世代の前の人を追い越すことはできませんでした。子供が親を抜かすことはできないし、前の世代の人を追い越すことはできないのです。こんな儒教の身分制度がありました。したがって、高度な親子関係に持ち込んで、自分は確かにやられたんだけれども、せがれにやられたと。せがれはどんなことをしても私を乗り越えることはできませんよ。という意味で、私はせがれにやられたようなものだと言って自分を慰めて、みじめな優越感に立って、勝ったつもりになる。こういった話がいっぱい出てきます。『阿Q正伝』を読むと。

それからこういうのもありました。あるときこてんぱんにやられるんですね。こてんぱんにやられて、相手がお前は最低な人間だからこんなふうにやられてるんだと、そういうように言えと、言われて、そこで阿Qは、別の言葉を使うんですね。おいらは虫けらさ、と言うんですね。そして、自分を最低まで貶める。そうする



と、相手は納得して去るんですね。去った後に何を言うか、われこそ自分を軽蔑できる第一人者である、とこう言ってですね、勝ち誇る、勝ったつもりになるんですね。これを魯迅研究者の片山智行さんなんかは、自己欺瞞と言っています。

それからこういうものもあります。この村にはいつも魯迅をいじめる、有力者、趙大旦那というのがいるんですけれども、金持ちというだけでなく、科挙の受験生、文童の親でみんなに尊敬されているのを聞くと、阿Qは何というか、おれの息子だったらもっと偉くなるとか言って、偽りにおいて、偽りを持ち出しておいて、勝ったつもりになる。これを譚桂林さんは盲目的自尊心と言っています。こういうふうには阿Qは、いつも勝ったつもりになる。こういったものは、まだまだいっぱい例があるんです。魯迅先生は、それを皮肉を込めて「精神的勝利法」なんだと、己の敗北をなんとか理屈をつけて勝利に転換することだというふうに言っています。皆さんどうですか。こういうところありませんか。ちょっと手を胸に当てるとですね、何となくありそうで、ないようで、あるなとそう思わせてくれるくらい、魯迅は、人の心の底の底をえぐり出して、当時の中国人の国民性をなんとか変えたいと。創立者は、ここに込められているメッセージはなんだろうかということで、こういうふうにおっしゃっていました。それは勝利でも何でもないと。仕方ないと諦めて、敗北に目をつむっているだけだと。あいつよりましだとうそぶいて自分をごまかしているんだと。諦めという目に見えない心の鉄格子に閉じ込められてしまっている。当時の中国の人々に、これに気が付いて、心の鉄格子を破ってもらいたいんですね、魯迅は。これは創立者がこういうふうには言ってるんですけど、実はそれは、魯迅自身が自分自身の中にある阿Q的精神を見据えながら、それを身もだえする思いで掘り出して、白日の下にさらした、だから非常に深さがあるんですと。だから創立者は、魯迅文学は心の底の底を見つめた文学だと、こういうふうには評価されています。

次が本題なんですけど、その阿Q的精神に見る世界性とか普遍性とかは何かっていうことなんですけど、『阿Q正伝』はすでに、世界40地域以上に60数種類の言語で翻訳されています。それだけの影響力を持っています。中米グアテマラのある作家はこういうふうには言っています。阿Q主義あるいは「精神的勝利法」は、われわれが権力者と、闘争する場合、われわれ自身が置かれている状況を認識するのを妨げるので、放り出されなければならないと。すなわち、事なかれ主義は、現実から目を背けるだけであって、現実を変えることはできない。こういうふうにとらえていまして、創立者はこのところを敷衍化して、この阿Q的精神にみる普遍性・世界性とは、世界を変えたいならば、まず自分自身を変える、これが『阿Q正伝』の普遍性、世界性ではないだろうかと言われています。したがって魯迅の文学は人間革命の文学ではないだろうか。

時間がないので簡単に触れますが、アジアの文学と魯迅というテーマのもと研究をしている人がいます。藤井省三さんという人なんですけれども、この人は、阿Q精神というものが、日本にも朝鮮にも台湾にもシンガポールにも香港にも、大きな影響を与えたと言ってます。特に顕著だったのは、植民地時代の朝鮮の知識人に対

する影響だと言っています。その当時の朝鮮の知識人が言っていたのは、阿Q 的人間が、朝鮮の近代化の妨げとなった、と。阿Q の、『阿Q 正伝』の影響力の大きさを物語っています。

これで最後なんですけれど、日本の魯迅研究家に伊藤虎丸さんという人がいるんですけれどね、この人も阿Q 像は世界文学に通ずる普遍性を持っている、というふうに言っております。魯迅が批判したのは、1つは阿Q の奴隸的根性。もう1つは、このところが非常に示唆的だと思うんですけども、阿Q を覚醒させなかった革命は、それは革命じゃないと。だからもう1つの批判は、阿Q のような、最底辺の農民を置き去りにした辛亥革命への批判もここに込められています。当時の知識人への批判もここには入っていると思います。私はこの阿Q のような最底辺の農民を置き去りにした辛亥革命への批判という、これも非常に重要なポイントかと思うんですね。これまで、世界のいろんなところで勃発した革命をよく見てみると、結局最後はどうなったかと、やはり最底辺の人々の農民とか、労働者とか、一般の人たちを多くの場合は置き去りにしたままの革命であったのではないかと。そういう意味で、この阿Q を覚醒させなかった革命は革命ではないという、このメッセージもやはり普遍性の1つに掲げてもいいんじゃないかなというふうに思います。時間になりましたので終わります。以上、私がとらえている阿Q の「精神的勝利法」と、それからそこに見る普遍性と世界性についてお話させていただきました（拍手）。

【司会】これから質問を受け付けたいと思いますけども、あと5分しかありません。質問用紙が皆さんお手元に行っていると思いますけども、授業の中で3人の先生どこかでつかまえて、納得いくまで質問していただければと思います。あと5分しかありませんので、先生お一人ずつどうしても聞きたいということがある方。

【質問】田中先生、ゲーテは、言語をどのように習得したのか、読んだのか。つまり自分で頑張って読んだのか、それとも先ほど魯迅のように優秀な翻訳者がいたのか、多くの国の言語を理解できたと聞いていたのすごく興味をもちまして、その点を教えていただければと思います、伺います。

【田中】ゲーテは7つの外国語を理解したというふうに言われていますけども、そのうちの1つであるイタリア語について、こういう話があります。イタリアにマンゾーニという国民作家がいます。ちょうどゲーテの晩年のころに活躍し始めた人で、このマンゾーニのことをゲーテは早くから非常に注目しまして、この人の作品をどんどん自分の雑誌の上で紹介しました。ドイツ人はなんでこんなにすごい作家のことを知ろうとしないのか、というわけです。このマンゾーニの代表作に、『いいなづけ』という長編小説があります。翻訳でも三巻あるんですね。これは非常に面白い小説ですので、みなさんにぜひおすすめします。

ところで、このマンゾーニ自身が出版直後に謝意をこめて、この作品をゲーテに送ってくるわけです。三巻本です。そのときの様子をエッカーマンが記録しているんですが、本が届いたという記事から一週間後には、もう三巻目に入ったというゲ

ーテの言葉が伝えられます。マンゾーニの、出版されたばかりの本ですから、中身はイタリア語なわけです。つまりゲーテは外国語のイタリア語で書かれた長編小説を、ものすごいスピードで読み進めていたことが分かるわけです。これほどの語学力をどうやって身につけたか。これは子供のころに父親が一言語ずつ全部、家庭教師をつけてマスターさせたんです。大変な教育パパですね。

【質問】 世界の文豪との交流の中で、ロシアの文豪のトルストイと、インドのガンディーとの交流ということで、書簡の交換をしているということを私もちょっと学ばせていただいたことがあるんですけども、非暴力、トルストイの非暴力に影響を受けて、インドのガンディーも、またはガンディーならではの非暴力の展開をした。ガンディーの非暴力はとても有名ですけども、エマソンは、自然の受け入れの一体ということで、いろんな宗教革命とかってちょっといま垣間見るようですごく興味深く先生の講義を聞いて感じたんですけども、非暴力についての影響、また何か文学ですとか、思想的に何か取り入れている点はあるのでしょうか。

【浅山】 エマソンは、非暴力については何も書いていないと思います。エマソンの弟子のソローが、奴隷制度を認めるアメリカ政府に税金を払わないという形で抵抗する。武器も暴力も使わない抵抗の仕方です。逮捕されて牢に入れられます（その模様は、後に『市民の抵抗』という本にまとめられます）。ここに非暴力の発想が出てくるんですね。暴力で何かをするのではなくて、制度を支えないようにするという抵抗の仕方をソローが紹介したのです。ソローのこの姿勢がトルストイに受け入れられ、ガンディーにも受け入れられたと言われます。ただ、ソローはエマソンがいなければ生まれなかった人です。エマソンの人間尊重、生命尊厳の思想がソローの考え方、行動の仕方を生んだといえると思います。

【司会】 高橋先生に。最後のお一人になります。

【質問】 高橋先生に質問がございます。もし高橋先生が魯迅の時代に魯迅が阿Q正伝を書き終えた直後に本当に幸運にも会うことができたら、何を聞いてみたいですか。

【高橋】 聞いてみたいのは、今日はしゃべりきれなかったんですけども、魯迅は阿Q精神を徹底的に批判するんですけども、阿Qに対するまなざしというのはとても温かいんですよ。だから、どうしてそんなに阿Qに対して温かいんですかということを知りたいです。

【司会】 ありがとうございます。時間がなくて大変恐縮です。このあとは来年4月からの本番の授業のほうを受講していただいて、納得いくまで質問していただければと思います。それを楽しみにして、今日はシンポジウムをこれで締めたいと思います。どうもありがとうございました（拍手）。



シンポジウム風景

#### 注記

掲載にあたり、各登壇者より加筆修正をいただきました。

本シンポジウムは、創価大学通信教育部文学部設置認可申請中に行われました。  
同文学部はその後まもなく認可され、2018年4月に開設されました。